

# ニューモックとNew York 天楼

奥岡 曹太朗

## ●はじめに

ニューヨークほど、人間的欲求に随い発展し、文化的歴史の浅い都市は他にはない。

そのため、ここでは、文化的事象は一切紹介せず、建築学、都市工学の視点からニューヨークを紹介するので、あしからず。

## ●オランダ人の到達

現在のニューヨークに都市を造り始めたのは、1614年のオランダ人だった。

当時、アメリカ大陸をインドと信じていたヨーロッパ人は、第二のインド航路開拓の前線基地として、現在のウォール街に正方形の要塞を建設し、そのまわりに数十の民家と数戸の農家が併設された。

これこそが、ニューヨークの前身、ニューアムステルダムである。

## ●ニューアムステルダムの拡張

オランダ人的気質から、ニューアムステルダムは完全なる、碁盤の目にマンハッタン島の北へ、北へと道が敷かれていった(定められていった)。

この時定められた都市計画が、現代建築に多大な影響を与えることになる。



## ●イギリス人の侵略

1664年、今度はイギリス人がニューアムステルダムを取って替わり、ニューヨークと命名する。すると、イギリスの強欲な商人達が、畑作に適した肥沃なマンハッタン島を、碁盤の目に区切られた2028個の升目状に買い取って行った。

そして、この年から人間の欲望に完全に一致した、ニューヨークの実利主義、快楽主義による発展の時代が幕を開ける。

## ●セントラルパーク

独立戦争を過ぎてからもニューヨークの主人公は、欲深いイギリス人商人から、欲深いアメリカ人実業家に替わっただけで、欲望を原動力にしたニューヨークの膨張は留まる所を知らなかった。

一方、ニューヨーク市民にとっては、膨張で自身を圧死させかねない程に、都市は過密状態となり、衛生状態も悪化の一途をたどっていた。

そこでニューヨーク市は、劣悪な環境のアパートで、島が埋め尽くされてしまう前に、5番街から8番街の間と59丁目から110丁目の間の処女地を買い取り、バリアーを張った。このバリアーが今の『セントラルパーク』である。

しかし、処女地と言っても全く手を付けない訳では無い。最小限の変化で、最大限のリラクゼーションを創造するのである。

(マンハッタン島で唯一曲線の小道、小川、池も総て計算し尽くされた結果である。)

## ●コニーアイランドとメトロポリタン

19世紀に入ると、ニューヨーク市民の欲求は静寂な自然だけでは物足りなくなり始めていた。

すると、市民の欲求不満で富を築こうと、世界初のテーマパーク、『スティーブルチェイス』『ルナ・パーク』『ドリームランド』の三つが、ニューヨーク郊外にあるコニーアイランドに建設された。



(当時のルナ・パーク→)

これら三つの共通のテーマが、当時大ヒット上映されていた『月面旅行』と『メトロポリタン』という二本の映画である。



この二つの映画に映し出される、天にまで届く摩天楼、激流のように流れる自動車道、空を埋め尽くす航空機が、ニューヨーク市民に自身の都市の将来像として映った事は間違いない。

### ●実現化されて行く将来像

ニューヨーク市の将来像が市民の間で明確化されていく頃には、将来像はもはや遠い未来にやって来る、夢物語ではなくなっていた。

そう、その頃にはもう、地下を走る鉄道や、一瞬にして高層階にワープできる籠、天にもとどく摩天楼を支える鉄筋コンクリート、配管設備、空調設備等が、実用化の時をまっていたのである。

### ●針と球

過密の問題を解決するにも、升目以上の立地面積を得られないマンハッタンの建造物たちは、上へ成長するしか選択肢は残されていなかった。

そのため、最小の立地面積で床面積を増殖することのできる、針がマンハッタンを埋め尽くす。そして、その針自身も自らの容積を増やそうと、球になろうとし、球自身も自らの立地面積を減らそうと、針になろうとする。

これらの針と球の駆け引きによって、摩天楼は誕生し、日々夢のマンハッタンに近づいてゆく。極端に言ってしまうと、マンハッタンの摩天楼たちは、総て針と球で構成されている。

### ●ゾーニング法

無限の成長を遂げようとするマンハッタンに、遂にゾーニング法という歯止めがかかった。

摩天楼の余りにも酷過ぎる過密化により、古き摩天楼は次々と生えてくる新たな摩天楼に埋もれてゆき、その存在感と日照時間を奪われていった。

そのため、新たに建設される総ての摩天楼に、立地面積と比例した高さの制限を設け、一定の高さにセットバック(ビルを道路から後退させること)を義務づけた。これらの規制により、ニューヨーク独特の摩天楼が誕生する。

## ●クライスラービルとエンパイアステートビル

ゾーニング法が制定されて以来、マンハッタン史上最大の摩天楼の背比べが起こった。かの有名なクライスラービルとエンパイアステートビルである。

なぜ、背比べが起きたのか、理由は極めて単純。一番高くないと注目されない。一番高くないと、尊敬されない。一番高くないと、マンハッタンを征服できない。そう、一番高くないと、全く無意味なのである。

当初の設計図上では、クライスラービルの方が少しだけ高かったため、クライスラービル側は、余裕綽綽で先に完成させ、勝利の宴を催していた。しかし、何ということだろう。完成したはずのエンパイアステートビルは屋上に全く無意味な四角錐の鉄塔を組み立てるのではないか！おかげでクライスラービルは取って付けられた張りぼての鉄塔によって、一位の座を奪われたのである。

後に、無意味と言われていた鉄塔を飛行船の停留所とし、乗客はマンハッタンの全貌を眺めた後、一番高いビルからニューヨークに降り立つのである。

しかし、もともと強風にすこぶる弱い飛行船がビル風をもろに受ける屋上に停留できるはずがないのである。

なんであれ、この二つの超高層ビルが上に行くに従って細くなる先駆的なデザインを世界に広めたことは間違いない。



(左：エンパイアステートビル、右：クライスラービル)

## ●大恐慌と妄想期

今まで止まることの無かったニューヨークの膨張も、1929年の大恐慌により、ぴたりと止んでしまった。

常に建ててばかりいた建築家たちも依頼がなくなり、手持ち無沙汰となった。

すると、建築家たちは暇になった分、今度は自分なりの夢のメトロポリタンを紙に描き始めた。そして、描いた紙を今度は建築家同士で見せ合い、意見交換をするようになる。意見交換を重ねるごとに、夢のメトロポリタンが具体的な形となって姿を現し始めた。

## ●空中歩道

具体的な形となった夢のメトロポリタンが次のようである。

「我々が目にするのは歩道都市である。歩道はビルを貫いて内部を走るアーケード付き道路であり、地上より一層上に設けられる。そして曲がり角毎にアーケードと同じ幅のしっかりとした鉄骨で組まれた橋がかかっている。都市内の小さな公園(これは将来数がさらに増えるだろうと信ずる)はこのアーケード式の歩道と同じ高さに揃えられる。」(『錯乱のニューヨーク』から引用)

その光景はまるで、絶えまなく流れる自動車道で、2028個にわけられた小島を橋で渡し、無機質な岩山を緑で豊かにした、現代版ヴェネチアである。(当時想像された、1970年代の予想図→)

## ●ロックフェラー・センター

そして遂に、膨らまし続けて来た妄想を実現できるチャンスが到来した。

複数の劇場を中心にした巨大商業センター、ロックフェラー・センターである。

ニューヨーク中の建築家、施行者、技術者、不動産業者、資本家、投資家、法律家がここぞとばかりに、群がってきた。

彼らが妄想の限りに描き尽くした設計図は、当初の設計図の数百倍に及んだ。それら数万通りの選択肢から絞り込まれた案は、ゾーニング法はもちろんのこと、現代版ヴェネチアの要素である空中廊下と空中庭園もしっかりと組み込まれた、その案こそ正にこれまでのマンハッタン建築の真骨頂となる。





(←ロックフェラーセンター：メインタワー)

### ●二人の来訪者

ロックフェラー・センターが完成した後、数々の摩天楼が建設されてきたが、どれも革新的要素はなく、足元にも及ばない完成度のものばかりであった。

そう、すでにマンハッタン建築は、ロックフェラー・センターを最盛期に、完全に息詰まっていたのである。

そんな停滞していたマンハッタンにフランスから一人の来訪者が現れた。

ル・コルビッチェとサルバード・ダリである。

彼らは想像とかけ離れたニューヨーク見て戸惑い、落胆し、憤りを感じ始める。そして、いままでマンハッタン建築と正反対の成長を続けてきたヨーロッパ建築による逆襲を企て始めるのである。

### ●ヴォワザン計画

来訪者である、ル・コルビッチェはマンハッタンの摩天楼は一つ一つが小さすぎ、摩天楼それぞれの良き所を相殺し合い、ただの醜い鉄筋コンクリートの針山と化していると主張する。

さらに、セントラル・パークについても、本来公園の緑は街にバランス良く点在するのが理想的であるのに、ただ一つのだだっ広い敷地に集めただけのセントラル・パークはニューヨークの無計画な都市の発展を如実に物語っているとまで主張している。

そこで、彼が考え出した都市再生案が既にパリ郊外で実践された、ヴォワザン計画である。

この計画は、まず道路で区切られた升をもっと大きくし、一つの升に一つの巨大な摩天楼を建て、余った土地にふんだんに緑の芝生と樹木を植え、自然と極めて一体化した大都市を建設する計画である。

(ヴォワザン計画：マンハッタン)

彼はこの計画の実現のためにまず、世界のシンボルとなる建造物に自分の案



を吹きこませようとする。その建物が、ルーズベルトの賜物、国際連合本部ビルである。

### ●浮かび上がる国連本部

本来、彼はこの建設計画にはアドバイザーとして参加しているだけであり、発言権はあるものの、責任者本人は彼のアドバイスを聞き入れなくてもよかったのだ。しかし、誰よりもしたたかである彼は、自分で一つの陣営を作り上げ、責任者も彼のアドバイスを聞き入れなくてはならない状況を作りだしたのである。

そして、今日建っている国連本部ビルには、他の摩天楼には無い大きな前庭がある、これは彼のヴォルビッチ計画が建設計画に多大な影響を与えたことを物語っている。



しかし、彼は国連ビルに触手を伸ばしただけで、他の摩天楼には一切触れずにニューヨークを後にしている。結局彼自身も数万人の欲で動くマンハッタンの強大な力に飲み込まれてしまったのである。

### ●変化の兆候

改革者が去った後、マンハッタンは再び自らの力で将来像を決めていかなくてはならなくなった。そのためには、エンパイヤ・ステート・ビルやロックフェラー・センターをも越す圧倒的な存在感を持つ、革新的なモニュメントが必要だった。

ちょうど良いタイミングで、マンハッタン島の南端、今のバッテリー地区にある電器部品店街が営業不振であった。ここは、完全なる弱肉強食の島。弱い主の土地はすぐに奪い取られる。そしてそこは、当時急速に拡大していた貿易経済の新たな拠点として、世界貿易センターの建設地となり、日系アメリカ人の山崎寛(ヤマサキ・ミノル)の設計案が選ばれ、建設責任者となった。

## ●二つの塔

彼の設計案の概要はこうだ。まず、升の殆どの面積を低層のビルの敷地にあて、隅に110階建てのツインタワーを象徴とする。

これならば、摩天楼の針山に舞い戻るジレンマに陥らず、『双子』というインパクトの強い、マンハッタンの王者にふさわしい風格を持てる。

また同時に、閉塞感の強いウォール街の避難地として、升の中央に広場と大聖堂を建てることにより、中世の街をイメージした馴染み深さを持たした。

さらに、ツインタワーの床面積をできるだけ増やして欲しいという業者の要望から、外壁と芯の部分に柱を集中させ、柱をこれから入るオフィスの邪魔にならないよう気を配った。また、強風時にビルの揺れが、最上階に集中させないように、柱をチューブ状にする事によって、タワー全体に柔軟性を持たせ、中階層でしなる設計にした。(日本の五重塔をイメージしてもらえると良い)

これらの設計はマンハッタンの住人から賞賛され、マンハッタン中の企業がツインタワーに移転したため、一時ウォール街が空になってしまうほどだった。

そして、摩天楼建築に念願の新風が吹いたのである。

だが、新たな王者の出現が裏目にでてしまう。





## ●裏目

2001年9月11日、ツインタワーに二機の旅客機が激突したことは皆さんも刻銘に覚えているだろう。

不運にも、柱を芯と外壁に集中させた事によって、激突した階の半分以上の柱が折れてしまった。普通に柱を分散させていれば、崩壊する事は無かつたらう。

とにかく、『世界一安全なオフィス』と言われてきたタワーが崩壊した事は、今まで築き上げてきた、夢のメトロポリタンに深い傷を負わせた事には間違いない。



しかし、一世紀近く育まれてきた野望が消えることはなかった。

## ●未来の摩天楼

マンハッタンにポッカリ空いた穴をいつまでもそのままにしておくことはできない。大幅に不足してしまった床面積を一刻も早く取り戻さなくては行けないからだ。

事件直後は慰霊碑の上にビルを建てるなんて、同じ過ちを繰り返すようなものだと、非難の声が大きかったため、設計には細心の注意を払わなくては行かなかった。

そこで、前のツインタワーが建っていた所にある、二つの正方形の虚空を中心にストーン・ヘッジのように摩天楼が囲む案が採用された。

しかし、床面積が少なすぎるという、業者の苦情と、もっとテロ対策を充実させろという、連邦政府の指令から、変更に変更を重ね、二つの虚空の隣に、これからのシンボルとなる、フリーダム・タワーの建設案が決行された。

このフリーダム・タワーは、正方形から始まる低層に、四辺が加わり、中層で正八角形となり、上層で、途中から加わった四辺の正方形となる、全体が45°捻じれるユニークな構造となっている。



(左端がフリーダムタワー)

この計画は現在も進行中であり、すでに六割方できている。しかし、充実したテロ対策と解放感のあるシンボルという、相反する目標に解決できずに居る問題(突撃してくる自爆車に耐えうる、ガラスのロビーなど)も未だにある。

(2011年現在)

●アジアに広がる革新の波

現在、アジアの各地で急速な経済発展と産業の金融化が進み、至る所で摩天楼が生え、もはやマンハッタンだけが高層建築の原点ではなくなっている。ニューヨーク、ロンドンに並んで『世界三大金融都市』として名を連ねる香港は、高層建築密度でマンハッタンを抜いている。





また、脱オイルマネーをスローガンに産業の多角化を目指し、爆発的な発展を見せるドバイでは、近代建築の革命と言ってよいほど、今まで考えられない革新的な摩天楼が建設されている。(近年『動くタワー』までもが企画中とか)



(←ブルジタワー：全長 800m)

そして、シンガポールではマンハッタンが長い間夢見てきた、メトロポリタン構想を、三つのビルを屋上で繋げ、柵の無いプールを設けるという方法で、一足先に実現してしまった。



(↑マリーナ・ベイ・サンズホテル屋上)



(マリーナ・ベイ・サンズホテル外観)

## ●都市化社会

前項で上げた都市以外でも、近年急速に発展している都市は発展途上国を中心に世界中で増え続けている。

産業革命直後の都市は、極めて不衛生であり、常に感染症と隣り合わせの場所、自然破壊の象徴、資本主義の影のようなイメージを持っていた。

しかし近年、世界中の各都市で上下水道を始めとする公衆衛生の整備が進み、都市の環境は大幅に改善され、都市部の平均寿命は地方を追い越すようになった。また、発達する通信手段によって、都市がより狭くなり、都市の流れが飛躍的に速くなった。

これらのように、都市社会は今までに無かった可能性を持つようになり、現在抱えている社会問題の糸口になるかもしれないと、注目を集めている。

ゆえに、これからの都市と直接関わっている建築学、都市工学は国際社会にとって、今までにないほど重要な学問となってきている。

## あとがき

これほど冗漫な文章を読んでいただきありがとうございました。本当にお疲れ様でした。気付いている方もいらっしゃると思いますが、この文章の生地の殆どが、現代建築の巨匠である、レム・コールハース著の『錯乱のニューヨーク』という、建築家なら誰でも一度は読んだことがあると言われるほど、有名な建築論文で占められています。

しかし、この本は1990年に刊行されたので、9.11事件から後の文章が、私のゼロから書いた文章ということになります。

勉強不足な事もあって、本の要約文のような形になってしまいました。これからはもっと、扱える資料を増やせるよう頑張ります。